



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

時 鳥(ホトトギス) 厠半ばに出かねたり 漱石]

こ の句には前書きとして「障(さは)る事ありて或人の招飲を辞したる手紙のはしに(添えた)」とある。この「或人」とは時の総理大臣西園寺公望である。西園寺首相は1907(明治40)年6月17日から3日間にわたって、神田駿河台の私邸に時の有名文人を招待した。

雨 声会とシャレた名をつけ、パリ仕込みのサロンというものを東京に実現したい、ということなのである。西園寺は近代文学について造詣の深い政治家で、フランス留学時代には、ゾラの小説に感溺したという]

こ の首相の招待に応じて出席したのは、大町桂月、泉鏡花、巖谷小波、国木田独步、幸田露伴、島崎藤村、田山花袋、徳田秋声、川上眉山、森鷗外、広津柳浪など17名。明治の日本文学史上の綺羅星を大集合させた感じではないか。しかし漱石はこの招待に応じなかった。断りの葉書に冒頭の句をそえて投函した。

冒 頭の句の意味は、トイレに入っていたときに、ホトトギスがあまりよい声で鳴きだしたので、聴きほれて出られなかった、というような意味である

う。事実、この時期漱石はこの月の23日から連載のはじまる、新聞小説「虞美人草」を執筆中であったのである。つまりいま夢中なので出られませんよ、ということか。ただし厠の中で時鳥の初啼きを聴くと不吉である、という言い伝えも込められた漱石の反骨の句という解釈もある。

そ れにしてもたかが数時間の首相のせっかくの招待を断ることはなからうが。文部省がくれるといった博士号を断ったあの反権威精神がまた現れたのかと誰しも思うであろうが、半藤探偵はどんでん返し結論を出す。これは読んでのお楽しみ。

釣 鐘のうなる許(ばか)りに野分か]

1 906(明治39)年10月の作品である。当時漱石は第一高等学校と東京大学の教授をしていた。一方で『我輩は猫である』『坊ちゃん』などがベストセラーとなり、小説が面白くて仕方がなくなっていた時期である。しか

し他方、文部省との約束で英国留学満2年のお礼奉公として、4年間は大学、高等学校に勤めねばならない。それが翌40年の春に満期になる。もう一息だぞ。もう半年頑張ればあとは好きな小説三昧になれるぞ。

我 慢に我慢を重ねて『うなる許りに』漱石先生はなっているのである。ええいっ、俺は俺のやりたいことをする、とぶんなげる直前にまでなっている。いまにも、うなりだしうなりだしている。その烈しいおのれの心を野分に吹かれている釣鐘に託したのである]

へ 一、写真で見る夏目漱石といえは教養人の代表で、穏やかな人柄と思っていたけれど、人は見かけによらないんだなあと思嘆してしまう。

探 偵はこのほかにも漱石は当初建築家を志望していたとか、いろいろな当て字を作って楽しんでいたなどを教えてくれる。例えば地烈太い(じれったい)、焼気になる[躍起になる]、婆かす(化かす)、鈍栗眼、(団栗眼)、明海(明るみ)、寸断寸断(ずたずた)、狐鼠狐鼠(こそこそ)、涙が煮染む(涙がにじむ)、迷子つく(まごつく)、癩違い(勘違い)、蚊弱い(か弱い)、空ん胴(がらんどろ)、焼点(焦点) などなど。兎に角面白い。ご一読を。



◀『漱石俳句探偵帖』
文春文庫
半藤一利 著
定価 本体 660 円+税